

植物学者郡場寛博士の履歴 (3) 1918-1920 年の国外留学¹⁾

山内 智²⁾

On the Record of a Botanist Dr. Kwan Koriba (3) His Studying Abroad in 1918-1920

Satoshi YAMAUCHI

キーワード：郡場寛，植物生理学，留学

1. はじめに

郡場寛博士(1882-1957)は、青森市出身の国際的に著名な植物生理学者である。東京帝国大学理科大学を卒業後、東京帝国大学、東北帝国大学農科大学(札幌)、京都帝国大学などで教鞭を執られ、昭南植物園長(シンガポール)、弘前大学学長などを歴任した。また、国内外の調査・研究にも尽力し多くの成果を上げている。特に植物生理学については先駆者で、その調査研究は国内外で高く評価されている。郡場寛の詳しい経歴については芦田穰治(1943)、中沢潤(1953)、郡場寛先生遺稿集刊行会(1958)、山内智(2009, 2010)等にまとめられている。

郡場寛博士のご自宅に保管されていた図書・写真などの資料は、平成14年に一括して郡場家から青森県立郷土館に寄附された。これらの資料等の調査研究から、著者は郡場寛博士の経歴(山内, 2009)、昭南植物園に於ける調査研究(山内, 2010)をまとめた。

更に、これらの資料の中には6回にわたる国外での調査研究、視察や国際会議参加の記録が含まれている。その渡航はアジア、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカと多方面に及び、国外の研究者との交流を深め、多くの成果をあげた。当時の国外旅行には多くの困難が伴ったと思うが、明細な日程等は記録されていない。このうち今回は最初の国外留学である大正7~9年(1918-1920)の文部省特派留学生について、現存の資料(蔵書、写真、手帳など)から郡場博士留学の足跡の一端をまとめた。

郡場博士の資料を一括して青森県立郷土館にご寄附いただき、さらに貴重なご助言をいただいた郡場是行氏、郡場央基氏、資料の寄附にご尽力いただき、本論の査読とご教示をいただいた弘前大学医療技術短期大学部名誉教授千葉滋男氏、資料整理に協力いただいた青森県立郷土館新谷徹氏、資料掲載にご助言をいただいた青森県知の財産支援センター並びに関係各位に心から感謝する。

2. 留学先

郡場は、大正7年(1918)36歳の時に文部省特派留学生となり、大正7~9年(1918-1920)に欧米に留学している。これに関する2通の公式文書が残されている。東北帝国大学農科大学(札幌)教授理学博士郡場寛宛に大正7年2月1日付け、文部大臣名で留学の辞令が出された(図1)。これには「植物学研究」と目的が明示され、留学先が「米国英国伊国瑞西国」と書かれている。さらに、外国留学生郡場寛宛に大正7年11月5日付け留専四一号(図2)で「佛国ヲ追加」と、留学先が追加されている。以上のことから留学の目的は植物学の研究であり、正式な文部省からの留学先にはアメリカ、イギリス、イタリア、スイス、フランスの5カ国が含まれていることが確認された。当時第一次世界大戦(1914年7月~1918年11月)が、ヨーロッパを中心に展開されており、留学先にドイツに入っていないのは、これらの事態が考慮されたと思われる。

以下の刊行物にも当時のことが記述されている。郡場寛先生遺稿集刊行会(1958)(以下 遺稿集, 1985と表示)には「第一次戦欧米」とのタイトルで、詳しい年月日は書かれていないが、旅行記が残されている。同書の略歴には「1918(大7)36才 III, 21: 横浜港出帆 米・英・仏・伊・瑞へ留学. 1920(大9)38才 VIII, 8: 神戸港着」と出国と入国の月日が明示されている。更に、芦田(1943)には滞在先等について「博士最初ノ外遊ハ大正7年3月世界大戦中ニシテ、滞米約1箇年、戦後ノ便ヲ待チテ渡英、瑞典、瑞西ヨリ更ニ奥、洪、チエツコ3國ヲ經テ濁逸ニ入り、PFEFFER ト會見後偶々氏ノ訃ニ接シ、吾邦植物学者ヲ代表シテ葬儀ニ列席花環ヲ捧ゲ、伊國ヲ經テ歸朝セリ。」と明細な記述がある。このことから欧米での郡場の動向の概要を知ることができる。

3. 米国での足跡

郡場の最初の留学先は米国である。遺稿集(1985)によると、最初ドイツに行きたかったが第一次世界大戦のため、欧州航路が廃止されていて、太平洋航路・米国経

1) 郡場寛博士コレクションに関する調査研究(3)、青森県の自然誌に関する調査研究(19)

2) 青森県立郷土館副参事(〒030-0802 青森市本町2丁目8-14)

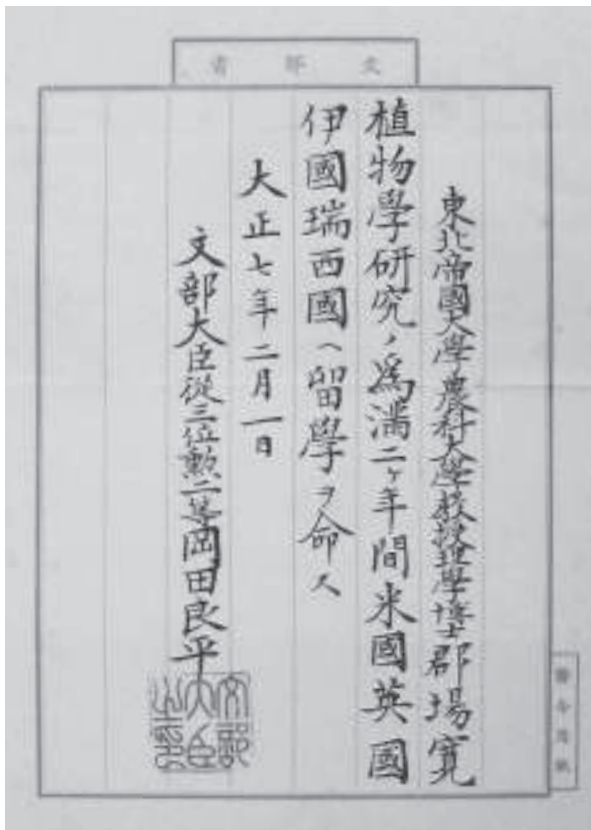


図1. 留学辞令 (大正7年2月1日)

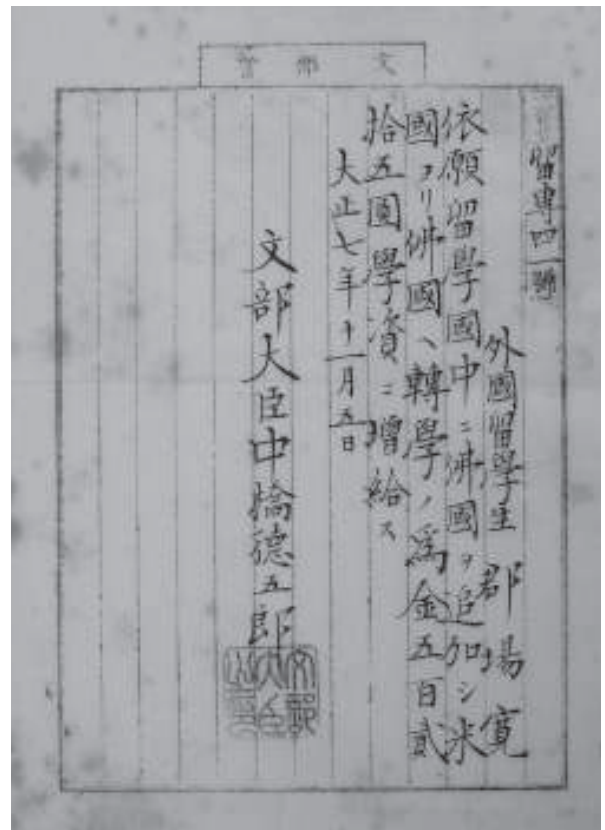


図2. 留学先追加辞令 (大正7年11月5日)

表1. メモ付き郡場寛蔵書一覧

著者	発行年	表題	メモ
----	1915	Nature and Science on the Pacific Coast	San Francisco, 9. April, 1918
B.L.Robinson, M.L.Fernald	1908	Flowering Plants and Ferns	Washington, April, 29, 1918
F.S.Mathews	1912	Field book of American Wild Flowers	Washington, 29/IV, 1918
F.S.Mathews	1915	Field book of American Trees and Shrubs	Washington, May, 17, 1918
H.Molisch	1916	Pflanzenphysiologie als Theorie der Gärtnerei	New York, 20. Juli, 1918
A.Wagner	1915	Repetitorium der Allgemeinen Botanik	New York, 20. Juli, 1918
R.S.Willows, M.A., E.H.	1915	phenomena	New York, 27. July, 1918
J.Loeb, M.D., Ph.D., Sc.D.	1916	The Organism as a Whole from a Physicochemical Viewpoint	New York, Aug. 17, 1918
W.Thompson	1917	Growth and Form	New York, Aug., 24, 1918
H.Günther, G.Stehli	-----	Gebrauch bei botanisch mikroskopischen Arbeiten	New York, Sept., 13, 1918
----	1914	The Care of Home Aquaria	New York, Sept., 18, 1918
H.Spencer	1864	The Principles of Biology I	New York, Sept., 20, 1918
H.Spencer	1867	The Principles of Biology II	New York, Sept., 28, 1918
D.T.Smith	1912	Essays in Philosophy and Physics	Boston, Dec. 30, 1918
A.Turnbull	1919	Life of Matter an Inquiry and Adventure	London, 30. June, 1919
W.G.Smith, F.L.S.	1908	Sowerby's Models of British Fungi in the Department of Botany	London, July, 7, 1919
----	1912	The Principal Pictures in the Fitzwilliam Museum Cambridge	Cambridge, July, 31, 1919
----	1915	Transactions and Proceedings of the Botanical Society of Edinburgh	Edinburgh, Aug. 2, 1919
L. & C. Schröter	1904	Alpen Wanderers	Bern., 3. Sept., 1919
R.Zsigmondy	1918	Kolloidchemie ein Lehrbuch	Bern., 17. Sept., 1919
V.Kohlschütter	1917	Die Erscheinungsformen der Materie Vorlesungen Über Kolloidchemie	Bern., 4. Oct., 1919
R.R.Wettstein	1911	Systematischen Botanik	Wien, 13. Nov., 1919
T.Pfeiffer	1918	Der Vegetationsversuch	Wien, Nov., 1919
G.Kümmell	1918	Photochemie	Prag., 28. Nov., 1919
M.G.Schmidt	1914	Natur und Mensch	Prag., 29. Nov., 1919
J.Velenovsky	1913	Morphologie der Pflanzen IV. Teil	Prag., 16. Dec., 1919
H.Molisch	1920	Populäre biologische Vorträge	Berlin, 6. Feb., 1920
R.Zsigmondy	1919	Zur Erkenntnis der Kolloide	Berlin, 6. Feb., 1920
H.Pringsheim	1919	Die Polysaccharide	Berlin, 11. Feb., 1920
E.W.Schmidt	1917	Siebröhre der Angiospermen	Berlin, 23. März, 1920
C.Nägeli	1860	Die Bewegung im Pflanzenreiche	Berlin, 24. März, 1920
E.Oettinger	1919	Die Farbe des Wassers	Berlin, 7. April, 1920
K.Pearson, M.A., F.R.S.	1911	Grammar of Science I. Physical	London, 15. June, 1920

* メモは英語または独語で書かれている

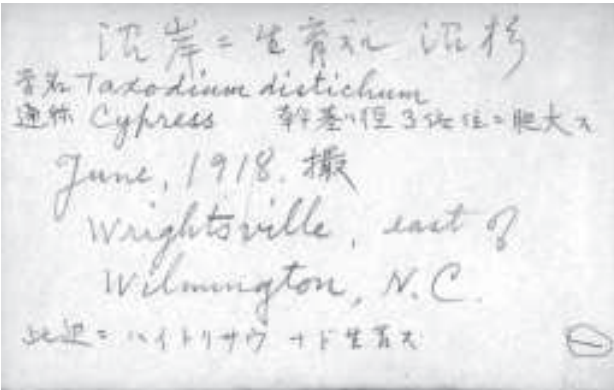


図3. Taxodium distichum の写真とメモ（郡場撮影記述）

由で行くことにした。そのため最初の訪問国が米国になった。出航は、大正7（1918）年3月21日、横浜港からである。船舶での渡米は通常2～3週間の航海である。蔵書の中に同年4月9日サンフランシスコとのメモ書き（表1・2）があることから、横浜港からの日数を考慮し、横浜港から当時運行していた北米航路のサンフランシスコ線かシアトル線のどちらかを利用した可能性が高い。その後は、蔵書メモから同年4月29日から5月17日にはワシントンに滞在していた。更に写真メモから同年6月には Wrightsville, east of Wilmington, N. C.（ノースカロライナ州ウィルミントン）で Spanish moss や *Taxodium distichum*（図3）の植物調査をした写真とメモがある。前者の植物の写真メモには「Spanish moss サルヲガセモドキ、サガリゴケ、蘚苔ニ非ズ パインアップルト同ジク アナナス科ニ属スル単子葉植物ニテ花モ咲ク結実ス 根ナク多毛ノ葉條ニテ樹梢ニ懸カル。 June 1918. 南北アメリカ固有ノ植物」と観察した記録が残されている。また、蔵書メモから同年7月20・27日、8月17日、9月13・18・20・28日にはニューヨーク、同年10月28日ボストンに滞在していたことが確認された。

この後、文部省から大正7年11月5日付けで米国からヨーロッパへの旅費等が支給（図2）された。しかし当時第一次世界大戦が、大正3年7月から大正7年11月まで展開されていた。このような情勢のもと、「大西洋ハ潜水艦ガハビコリ危険ナ為渡航ガ許サレズ 時期ヲ

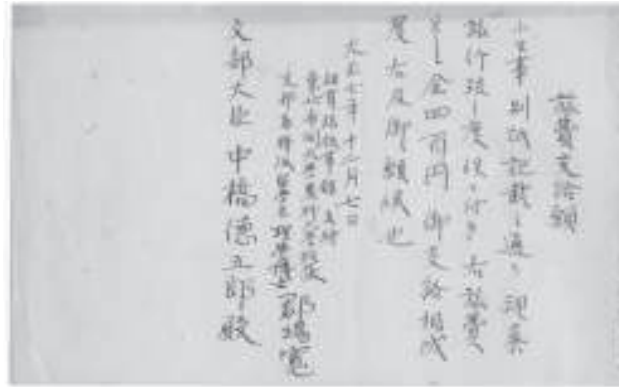


図4. 旅費支給願（下書き）



図5. 旅費支給願添付旅行予定地

待ツテイル内ニ一年過ギテ仕舞イマシタ」とある（遺稿集、1985）。郡場は、旅費の支給を受けながら、米国からヨーロッパに渡ることは困難であったことを裏付けするような資料がある。旅費支給願に関わる下書き（筆跡；ご子息確認）で、「旅費支給願」（図4）、「旅行予定地」（図5）、「旅行日記」、「申報書」の4点である。

「旅費支給願」（図4）には、文部大臣宛で、郡場の肩書き等には「紐育総領事館気付、東北帝国大学農科大学教授、文部省特派留学生理学博士」と、連絡先をニューヨークの総領事館とし、大正7年12月7日付けとなっている。これは文部省から同年11月5日付けで発令された米国からヨーロッパへの追加旅費等の通知（図2）の後であることから、終戦後の交通機関回復や政治情勢などにより、更に米国に留まることにしたと推測される。「旅行予定地」（図5）には、大学や農事試験所のほか、樹木園、植物園なども含まれている。

「旅行日記」、「申報書」は、訂正や追加などされた下書きである。以下に全文をそのまま筆写する。「旅行日記 従大正七年十一月、至大正八年六月。大正七年十一月八日米国紐育出発、コンネチカット州ニューヘヴン着二泊、エール大学及同州立農事試験所見学。十一月十日ニューヘヴン発マサチューセッツ州ボストン着、大正八年一月八日迄滞在。ボストン滞在中ハーバード大学植物学教室植物園、アルノード樹木園及ブッセー遺傳学院へ数回見学、其他カーネギー營養化学試験所、ボストン醫科大学等見学。尚、十二月十二日より十八日迄旅行。

マ州ウスター市クラーク大学，ノルサンプトン市スミス女子大学，アマスト町マ州農学校及アマスト大学，サウスハドレー町マウントホリオーク女子大学，ロードアイランド州プロヴィデンス市ブラウン大学及マ州ウヅホール臨海実験所見学。大正八年一月九日ボストン出発，紐育州シラキユース市泊，翌日シラキユース大学見学の上同州イサカ着。一月十日より十三日迄イサカ滞在カーネル大学見学。一月十四日同州ゼネヴァ市，州立農事試験場見学の上ロチスター着。一月十五日ロチスター大学及バウシュロング顕微鏡会社見学の上バッファロー着。一月十六日加奈太トロント着二泊，トロント大学見学の上，十八日ミシガン州デトロイト着」とある。

「申報書 従大正七年十一月，至大正八年六月。扁桃腺炎を罹り同地にて二泊静養せしも回復に向かわず止を得ず，ミシガン大学の見学を後に廻し，シカゴへ直行。一月廿日より五月十八日迄シカゴ滞在，其間主としてシカゴ大学及クレラー科学図書館へ参り，尚，ミシガン湖畔デュンパーク，ミラー帯の移動砂丘に於ける植物生育状態の変化を三回観察。又五月八日より二日間ウィスカンシン州マヂソンへ参りウィスカンシン大学見学。五月十九日シカゴ発ミゾリー州セントルイスへ参り三泊，ミゾリー植物園及植物学教室，醫科大学等見学。五月廿二日セントルイス発イリノイ州アルバナへ参り三泊，イリノイ大学見学。五月廿五日アルバナ発オハヨー州シンシナチへ参り三泊，同大学見学。五月廿八日シンシナチ発途中ケアリー一泊の上，翌廿九日ミシガン州ア

ンアーボア着三泊，ミシガン大学見学。六月二日アンアーボア発デトロイト着，パークデヴィス製薬会社見学。六月三日ナイアガラ経由，四日紐育着。六月十二日ロッテルダム号便乗，紐育解纜。六月廿日英国ファルマス着港。六月廿一日同港上陸倫敦着」と渡英する迄のことが訪問先，病気など詳しく記述されている。更にこの日程の一部を裏付ける写真がある。郡場は，大正8年1月20日より同年5月18日までシカゴに滞在していたが，同年3月7日シカゴ美術館前での写真（木原，1968）がある。また写真メモに「6/III, 1919, Cary, Ill.」及び「9/III, 1919, Cary, Ill.」（図6）と記述してあるスキー場でのジャンプ台の写真がある。郡場はスキーが堪能で，この2日間はCary, Ill. に日帰りでスキーをしていた。誰かが同行したと思われるが不明である。

4. ヨーロッパでの足跡

前述の「申報書」によると，郡場が欧州に入ったのは，大正8年6月12日にニューヨークを出発し，同年6月20日に英国の南部の港町ファルマスに到着し，翌日下船した時である。同日ロンドンに到着した。これを裏付ける郡場の手帳がある。この手帳には，年は書かれていないがこの日程に該当する月日，曜日とメモが書かれている。これによると「申報書」同様に6月12日（木）ニューヨークから「昨晚 Hoboken 泊」して出発した。6月20日（金）に英国の南西部にあるコーンウォール地方の「Falmouth 着」し，翌日の6月21日（土）に上陸した。

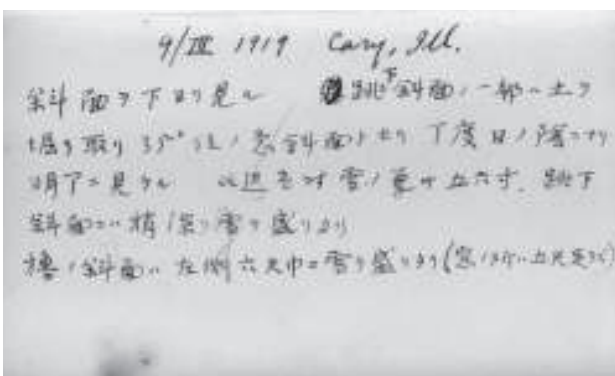


図6. Cary, Ill. (1919年3月9日) にて



図7. 「Jardin de Luxembourg, Paris」



図8. 「グリンデルワルド村，黒鷲館とウエッターホルン」

その日のうちに「London 着」した。そして6月28日には「London 発」した。その後、蔵書メモによると同年6月30日、7月7日にはロンドンで図書を購入して、一度ロンドンに戻ってきた。また、手帳に「9/VII, 1919, Kew Gardens」の記述があり、同年7月9日ロンドン南西部にある王立植物園キューガーデンの見学に出かけている。そしてケンブリッジ市(蔵書メモ同年7月31日)、エディンバラ市(蔵書メモ同年8月2日)と調査旅行している。また、手帳に「10/VIII, 1919, Ben Nevis, 9:18 発, Claggan 9:41, 山頂 1:10, 同発 1:35, F. W. 着 4:33」とあり、同年8月10日に英国で最高峰のベン・ネヴィス山に登頂し、登山口のある Fort William (フォート・ウィリアム) に下山している。山頂まで約4時間かかっている。この地域の植物調査を行なったと思われるが、調査記録は資料には無かった。

郡場が、イギリス海峡を渡った月日の記録は発見できなかった。遺稿集(1985)には「英国カラ仏蘭西ヲ経テ瑞西ニ行キ此所ヲ拠点トシテ初はオーストリアとチェコ次ニハ独逸最後ニハイタリアアヲ見学シテ再ビ倫敦ヘ帰り船デ帰ッタノデス」。また、芦田(1943)によると「戦後ノ便ヲ待チテ渡英, 瑞典, 瑞西ヨリ更ニ奥, 洪, チェコ3國ヲ経テ獨逸ニ」とその日程が記述されている。

遺稿集(1985)に「フランスへ渡った。然し九月も間近くなり、アルプス登山が出来なくなると懸念し、巴里の見学は一週間で済ませて瑞西にはいった」とある。年月日は書かれていないが、写真メモに「Jardin de Luxembourg Paris」(パリのルクセンブルグ公園, 図7)、「マルセイユ郊外公園」と記載された写真資料が複数枚ある。これらの写真は、この時の撮影と思われる。更に、蔵書メモに大正8年9月3・17日スイスの首都ベルン、手帳に「26/IX. 1919, ベルン」、蔵書メモにも同年10月4日に同じくベルンとある。このスイス滞在中に、同年9月7日(手帳)に友人二人でユングフラウに登山している。裾野の村で、牛が牧場を歩いていたと当時のことが述べられている(遺稿集, 1985)。更に、蔵書メモに同年11月13日にオーストリアの首都ウィーンの記述がある。ここからチェコに向かったが、途中の Brno ブルノ駅で列車に荷物を乗せて、売店に菓書を買に行き列車を乗り違えてしまい、お金と旅券以外の荷物を紛失した(遺稿集, 1985; 木原, 1966)。その後、蔵書メモで同年11月28・29日、12月16日にチェコの首都プラハに滞在が確認された。その後、理由は不明であるがスイスに引き返している。写真メモ「1919年12月末, グリンデルワルド村, ホテルアドラー(黒鷲館)前にて, 松濤, 郡場, 丸谷, 八木, 楨」「グリンデルワイド村 黒鷲館とウェッターホルン」(図8)「大正9年1月6日瑞西ベルン郡, 上グリンデルワルド氷河トンネル入口前ニテ撮影, 楨有垣氏撮影, 郡場, 松濤, 丸谷, 八木」と裏書きされた写真が数枚ある。5人の日本人の名前が書かれており、連絡し合って同行したものと思われる。そし



図9. 郡場寛「Berlin?, 1920」

て、一緒に氷河の調査、スキーなどを行なった。その後、写真メモにドイツの München ミュヘンと書かれ、大正9年1月22・23・24・25日の年月日が併せて記述された写真が数枚ある。

郡場は、ドイツの植物学者 Wilhelm Pfeffer と会見したが、その後、他界し、その葬儀にも参列した。Wilhelm Pfeffer は細胞の浸透圧を初めて測定した研究者で、大正9年1月31日に他界している。会見日は不明であるが葬儀当日はドイツの Leipzig ライプツヒに滞在していた(芦田, 1943; 木原, 1966)。更に、写真メモにライプツヒ同年1月31日、2月1・3・4・9日、蔵書メモに同年2月6, 11日、3月23, 24日にドイツの首都ベルリンと記述されている。このときのホテルで撮影したと思われる郡場自身の写真(図9)があり、裏書きに「Berlin?, 1920」と書かれた写真が2枚がある。更に手帳には「大正九年三月十五日, 於伯林, ステークリッツ, アルプレヒト街ボーネンカフェー, 木村彦右衛門, 高柳賢三, 郡場寛」と記述があり、この日に3名がカフェーで会い、郡場寛の手帳にサイン(3人の筆跡が異なる)を残した。また写真メモに「6. April 1920, Berlin」同年4月6日ベルリンと記述されている。ドイツではミュヘン、ベルリンに長い期間滞在していたことが確認された。

その後、手帳に「14.V, 1920, Palermo」と記述されている。Palermo はイタリア南部のシチリア島のパレルモである。この後の記録として一ヶ月後、蔵書メモに大正9年6月15日ロンドンの記述がある。

帰朝について「最後ニハイタリアアヲ見学シテ再ビ倫敦ヘ帰り船デ帰ッタノデス」(遺稿集, 1985)とある。蔵書メモに大正9年6月15日ロンドンの記述があり、また神戸港に同年9年8月8日(遺稿集, 1958)帰港して

表2. 国外留学 (1918-1920年) 日程表

年月日	国名	滞在地ほか	年月日	国名	滞在地ほか
大正7年 (1918)			6.4.	アメリカ	ニューヨーク着
3.21.	日本	横浜港出航	6.11.	アメリカ	ニューヨーク・Hoboken泊
4.9.	アメリカ	サンフランシスコ	6.12.	アメリカ	ニューヨーク発 (航路, ロッテルダム号)
4.29.	アメリカ	ワシントン	6.20.	イギリス	ファルマス港着
5.17.	アメリカ	ワシントン	6.21.	イギリス	同 上陸, ロンドン着
6.-.	アメリカ	ウイリントン	6.28.	イギリス	ロンドン発
7.20/27.	アメリカ	ニューヨーク	6.30.	イギリス	ロンドン
8.17.	アメリカ	ニューヨーク	7.7.	イギリス	ロンドン
9.13/18/20/28.	アメリカ	ニューヨーク	7.9.	イギリス	ロンドン, キューガーデン見学
10.28.	アメリカ	ボストン	7.31.	イギリス	ケンブリッジ
11.8.	アメリカ	ニューヨーク発, ニューヘヴン着2泊	8.2.	イギリス	エディンバラ
11.10.-1.8.	アメリカ	ニューヘヴン発ボストン着, 滞在	8.10.	イギリス	ベン・ネヴィス山登山
12.12-18.	アメリカ	旅行(ウスター, ノルサンプトン, アマスト, サウスハドレー, プロヴィデンス)	8.-?	フランス	パリ (一週間滞在)
大正8年 (1919)			9.3.	スイス	ベルン
1.9.	アメリカ	ボストン発, シラキューズ泊	9.7.	スイス	ユングフラウ山登山
1.10.-13.	アメリカ	イサカ着, 滞在	9.17.	スイス	ベルン
1.14.	アメリカ	ゼネヴァ経由, ロチスター着	9.26.	スイス	ベルン
1.15.	アメリカ	バファロー着	10.4.	スイス	ベルン
1.16.	カナダ	トロント着, 2泊	11.13.	オーストラリア	ウィーン
1.18.	アメリカ	デトロイト着 (扁桃腺炎 二泊静養)	11.28/29.	チェコ	プラハ
1.20.-5.18.	アメリカ	シカゴ滞在	12.16.	チェコ	プラハ
3.6.	アメリカ	Cary, Ill.	12.末.	スイス	グリンドルワルト
3.7.	アメリカ	(シカゴ美術館)	大正9年 (1920)		
3.9.	アメリカ	Cary, Ill.	1.6.	スイス	グリンドルワイト氷河
5.8/9.	アメリカ	マデソン	1.22-25.	ドイツ	ミュヘン
5.19.	アメリカ	シカゴ発, セントルイス着, 3泊	1.31.	ドイツ	ライプツヒ
5.22.	アメリカ	セントルイス発, アルバナ着, 3泊	2.1/3/4/9.	ドイツ	ライプツヒ
5.25.	アメリカ	アルバナ発, シンシナチ着, 3泊	2.6/11.	ドイツ	ベルリン
5.28.	アメリカ	シンシナチ発, ケアリー着, 1泊	3.15/23/24.	ドイツ	ベルリン
5.29.	アメリカ	ケアリー発, アンアーボア着, 3泊	4.6.	ドイツ	ベルリン
6.2.-.	アメリカ	アンアーボア発, デトロイト着	5.14.	イタリア	シチリア島パレルモ
6.3.	アメリカ	ナイアガラ経由	6.15.	イギリス	ロンドン
			6.-.	イギリス	(出航)
			8.8.	日本	神戸港 帰港

おり、帰港したのはロンドンで図書を購入してから 55 日目である。当時ロンドンからインド経由で日本まで船便で約 50 日間の日数がかかったことから、乗船日は不明であるが船便を利用して帰国した。

5. おわりに

郡場の最初の国外調査は、第一次世界大戦の影響を受けたものの、当初の予定の二ヶ年(図 1)を超え、二年四ヶ月(表 2)に及ぶ長期留学であった。その留学先は、今回の資料調査等で欧米の広範囲にわたってことが確認された。特に欧州は第一次世界大戦直後であり、交通機関や食糧事情も悪かったと思われるが、意欲的に各国の大学、試験機関、植物園や公園を回り、植物に関する多くの調査研究を行なった。初めての国外留学でありながら、充実した研究活動であったことが伺える。

その後、郡場はミクロネシア諸島、東南アジア、南米などの調査研究、視察、国際会議などで海外に出かけている。今後、これら国外での活動について順次まとめて

行きたい。

引用文献

- 芦田譲治, 1943. 理学博士郡場寛の略歴. 植物学雑誌, 57 (674): 98-103.
- 木原均 編, 1966. 生物学閑話, 第II集. 廣川書店. pp. 293.
- 木原均 編, 1968. 生物学閑話, 第III集. 廣川書店. pp. 286.
- 郡場寛先生遺稿集刊行会, 1958. 郡場寛先生遺稿集. pp. 299.
- 中沢潤, 1953. 青森県出身の生物学者(2) 郡場寛先生. 進化, 5(2): 18-20.
- 山内智, 2009. 植物学者郡場寛博士の履歴. 青森県立郷土館研究紀要, (33): 28-34.
- 山内智, 2010. 植物学者郡場寛博士の履歴(2) 昭南植物園. 青森県立郷土館研究紀要, (34): 19-26.